

# 懷風藻

## ——文選の影響について——

大塚山子

### 目次

まえがき(略)

一 文選の渡来

二 懷風藻序と文選序

三 懷風藻の詩題と文選

四 懷風藻の表現と文選

(1) 句法

(2) 故事(略)

(3) 語彙(略)

結び

一 文選の渡来

文選は上は周代より、下は梁代に至るまでの賦詩文を昭明太子が撰じたものである。成立したのは六国の梁時代、西暦五三二年であり、作者数延べ百三十人、作品も三十巻にも及ぶ膨大な総集となっている。

懷風藻はこれよりも約二百年遅れ、七五一年に成立した。この二百年の間には日中交渉も頻繁に行なわれていた模様である。それは我が国からは遣隋使、遣唐使の派遣として、中国からは仏教が伝来した事、又、懷風藻の作品に見えるように、新羅の使人が何度も来日した事などによって証明される。こうした日本と大陸との交渉によって、我が上代人は遙かに進んだ中国文学に触れる事ができたのである。

当時としては、中国文学の白眉であったのがこの文選である。これが日本へ伝わったのは牧野謙次郎氏の「日本漢学史」や「国譯漢文大成、文選上」によれば、推古朝であろうと言われている。その理由としては、聖德太子の十七條憲法、第五條  
便有<sub>レ</sub>財之訟。如<sub>二</sub>石投<sub>一</sub>水。乏者之誅。似<sub>二</sub>水投<sub>一</sub>石。是以貪民。則不<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>由。臣道亦於焉闕。

の言葉が、文選卷三七の李蕭遠作「運命論」の、

其言也如<sub>二</sub>以<sub>一</sub>水投<sub>二</sub>石。莫<sub>二</sub>之受<sub>一</sub>也。及<sub>二</sub>其遭<sub>一</sub>漢祖。

其言也如<sub>二</sub>以<sub>一</sub>石投<sub>二</sub>水。莫<sub>二</sub>之逆<sub>一</sub>也。云々

の言葉に基づくと指摘されている。その後、近江から奈良朝にはい

ると、この文選は官吏登用試験の課目とされていた。それは養老令に、

凡進士。試三時務策二条。帖所レ讀。文選上帙七帖。爾雅三帖。

(考課令)

等と示されているのによつてわかる。試験の課目にもなつていた程だから、上代人は文才のある者は勿論のこと、一般人も広く、この文選を愛読していた事であろう。

平安朝にはいつても、清少納言が「枕草子」に、

文は文集、文選、はかせの中文

と書いているように、文選は皆にもはやされた詩文であつた。

文選が渡來した事は、このように我が國の文学發展に多大の影響を与えたのである。

## 二 懷風藻序と文選序

懷風藻序を読んで、先ず目につく文体の特徴は、それが四六駢體を成しているという事である。即ち四、六言の句が主となり、それに対句の形も至る所に見られる。例えば、「孔子之学」で済む所を「；洙泗之風、；齊魯之学」と故事を引き合ひに出し、わざわざ対句の形にしたような所もある。故に、其の中には難解な語句も少なくないが、このように四言、六言や対句を取っている為、視覚美や聴覚美を備えている。

懷風藻序は形式の上でも、このように整つた四六文の形を取っているが、更に、内容的にも古來の文章の發生や歴史を述べた名文の誉れ高いものとなっている。特に岡田正之氏や杉本行夫氏はこれを絶賛された。<sup>其</sup>

それにしても、これ程の序文が書けたとは一体何に依るのだろうか。撰者自らの独創に依つたものであつたのだろうか。吉田幸一氏はここに、昭明太子の文選序があつたことを説かれた。<sup>其</sup>

吉田氏によると、この序文は編纂法から、叙述法、語彙の同じようなものを用いている点まで、文選序を手本にして書いていると言われる。果して、氏の言われる通り、懷風藻序と文選序とはそんなに似ているのであろうか。ここに両序を比較しながら、検討してみることにしてしよう。説明の便宜上、用語、句法の類似しているものについては、点及び傍線により示すことにした。尚、説明を簡潔にするために、両序文を適宜に区切り、又、特に類似の甚だしい箇所だけあげてみることにする。

### 文選序

式觀元始。① 少觀玄風

② 冬穴夏巢之時。③ 如日

飲血之世。④ 世質民淳。

斯文未作。

### 懷風藻序

① 逸聽前修。② 遐觀無篇。

③ 嶽山降醜之世。④ 柵原

⑤ 建邦之時。⑥ 天造草創。

人文未作。

先ず、この冒頭の部分は何れも人文が未だ起らない時の事から書き出している。形式面からみても何れも四六文であるが、字句の順序まで、四・四・六・六・四・四言の配列になつており同じである。

この冒頭文に続き、両序は次に文の起源、發展経路を客観的に記している。(略)<sup>(この部分)</sup>

⑦ 余臨撫餘閑。居多暇日。⑧ 歷觀文面。泛覽辭林。

⑨ 余以薄官餘閑。⑩ 遊心文圃。聞古人之遺跡。想風月之舊遊。

この部分、心を文面に通わし、古人の詩文に触れた事を叙述している点で、修辭的に同じ形態を取っている。

⑪ 遠自周室迄千聖代。⑫ 都爲三十卷。名曰文選云爾。凡次文之體。各以彙聚。詩賦體既不一。又以類分。類分之中。各々以時代相次。

⑬ 遠自淡海。云暨平都。⑭ 凡一百二十篇。勒成一卷。作者六十四人。具題姓名。并顯爵里。冠于篇首。余撰此文意者。爲將不忘先哲之遺風。故以懷風名之云爾。于時天平勝宝三年。歲在辛卯。冬十月也。

(懷風藻目錄) 略々以時代相次。

この部分、叙述している事は同じとみてよい。文選の方は周代よ

り梁までの作品を集めて三十卷とし、これを文選と名付けたということを述べている。一方、懷風藻の方は近江朝より、奈良朝までの作品を集めて一卷と成し、これに「懷風」と名付けた所以を記している。何れも収集した作品の時代、巻数、書名の事を述べている点で一致する。

又、文選、懷風藻と名付けられた所以を考えてみると、文選は沢田ある文の中から、すぐれた作品を選び出して編集した事から「文選」と名付けられ、懷風藻は「爲將不忘先哲之遺風」が示す如く、先人の残したすぐれた文学の余風(なごり)を懐く事から、この名が付けられた。それに、懷風藻のこの「藻」については我が国の石上乙麻呂の「衍悲藻」(佚書)のそれに倣ったものだろうと言われている。これを説かれるのは岡田正之氏や小島憲之氏等であるが、両氏によると、詩賦を「藻」というのは六朝以前の詩文には、文選序の「翰藻」や六臣注本の「英藻」等、例があるが、書名にこの「藻」を使ったのは見えないというのである。

このように、それらの書名の持つ意味、及び書名が我々に与える感じでは、両者一致するものではない。その上、中国に於ては書名に「××藻」と付いたものは、六朝以前にはないのである。そうしてみると、文選、懷風藻という名義については共通点がないように見受けられる。

しかし、これらを編集した撰者の気持ちや推し量ってみると、そこには古来のすぐれた詩文が傷つけられたり、なくなったりしないよう、それを大切に残して置こうという気持ちが働いている。つまり、何れも昔のいいものを残そうとする点では相通じるものがあるのである。

以上、簡単ではあるが、文選序と懷風藻序を比較してみてきた。確かに吉田氏の言われる通り、文全体の流れからして、これらは略と同じ叙述となっている。

それに用語・句法もかなり小さい点まで学んでいる事がわかる。特に

### 文選 序

(吉甫有稷若之談  
李子省至矣之歎)

(龍潛王子 翔雲鶴於風筆  
鳳翥天皇 泛舟舟於落濤)

(神納言之悲白髮  
藤太政之詠玄造)

のように、作者とその詞句をあげて対句とする手法等、随分、細かな点まで学んだ形跡が伺われる。

編纂法は勿論言うまでもない。懷風藻が時代に配列する方法を取ったのは、文選の「各々以時代相次」によっているのである。懷風藻は総集編纂としては万葉集よりも早く、我が国に於ては始めてのものである。(懷風藻五十年万葉集五十年成立) それ故、文選の編纂法に倣ったとて、何の不思議があろう。寧ろ当然な事かも知れない。

岡田氏はこの時代順の編纂にした事について、

本集は、人爵の高下を問はず、僧俗の區別を論ぜず、一に時代の前後を以て之を編纂したり。撰者は、其の事を表白して「略々以時代相次。不以尊卑等級」と云へり。此の如くにして始めて、時代の推移を偲び、今昔の感を深からしむべし。撰者が年代順に取りしは、偶然にあらざるなり。(近江奈良朝の漢文学)

と撰者の意思を尊重した見方をしておられる。「懷風」と名付けた撰者の意図から考えると、この発言も頷ける所である。

しかし、ここでは撰者の懷古の念に基づき編纂法を時代順にしたというよりも、文選のそれに倣ったという見方が妥当であろう。この序に於てはあらゆる面に文選模倣の跡が見えるし、これだけが懷風藻撰者の独创に依ったとは考えられないからである。

表現形態・編纂法・語彙の同じようなものを用いた点、及び同じような句法を取った点等、あらゆる面に於て、懷風藻撰者は文選序を手本として、序文を書いたと思われる。

### 三 懷風藻の詩題と文撰

前章に述べた所により、懷風藻の撰者は文撰の影響を受けた事が略々察せられた。それでは実際、懷風藻の作者達は如何だったのであらうか。作品を吟味して行く事にしよう。そこで先ず、手がかりを詩題に求め、文選との関係をみてみたい。

ところで、文選は序に示されたように、文体別に分類され、その類三十九種もある。懷風藻が漢詩であるから、その中でもここでは「詩」の項を取り上げて検討する事にする。文選のこの「詩」も内容面よりして、更に二十三種に分類されている。これを示すと次の如くである。

補亡 6 述德 2 勅勅 2 献詩 3 公讌 14 祖饌 8 詠史 21  
百一 1 遊仙 8 招隱 3 反招隱 1 遊覽 23 詠懷 19 哀傷 13  
贈答 72 行旅 34 軍戍 5 郊廟 2 樂府 41 挽歌 5 雜歌 4  
雜詩 93 雜擬 63

(注) 数字は「国譯漢文大成文選上」の文選解題に基づく作品数である。

これに対して懷風藻は如何なるものを題材としているのであろう

か。試みに分類してみると、大よそ次のような結果となった。

侍宴從駕49 (そのうち長屋王宅に宴する詩21)

遊覧13 (そのうち、吉野に遊ぶ詩10)

述懐8

贈答8

七夕6

詠物5 (詠孤松1 詠月1 詠雪2 詠美人1)

その他27

括弧に示した長屋王宅に宴する詩は、新羅の使人の送別の詩となつてゐるので、文選では祖餞の類に入る所である。又、吉野に遊ぶ詩は、吉野を神仙境に譬へてゐるようになり、遊仙的な匂いが強いので、文選では遊仙類にも入るとみてよい。

これからわかるように、懐風藻は公的場面で読まれた宴集の作品が圧倒的多数を占める。これは文選の「公讌」と示された部類に入るのであるが、岡田正之氏が

侍宴從駕讌集の如きは、六朝以来の風尚であつて、隋唐にも盛行はれたもので、支那文化の移植に力を注いだ近江奈良朝に此の種の風流韻事の多かつたのは尤なことである。(近江奈良朝の漢文学)

と述べておられるように、宴集の多いのは六朝以来の風尚であり、一概に懐風藻が文選だけの影響を受けていると説く事はできない。又、作品の割合からみても、懐風藻の宴集類は約五割を占めてゐるのに対し、文選の公讌詩は全体の一割にも満たない数である。

これらから察すると、懐風藻の詩題は文選の影響を受けなかつたかのようにみえる。が、懐風藻に宴集類が多いのは、奈良朝に於て

は、詩が宮廷を中心として作られた為、そうだったのであり、文選との割合を云々する必要はない。唯、文選と懐風藻とが取り扱つた詩題に、どれだけ共通点を持つてゐるのかという事が問題となる。

懐風藻には公讌は勿論、遊覧、遊仙、贈答、詠懐詩などに当る作品がそれぞれ数首ずつある。それに、その他の中に纏めてしまつたが、そこにも「悲不遇」「在唐憶本郷」「仲秋釋天」等と、文選の哀傷、行旅、郊廟に類する作品もある。この事実からすると、やはり題材についても広い範圍に亘り、懐風藻は文選によってゐると考えざるをえない。

#### 四 懐風藻の表現と文選

前述したように、懐風藻は漢詩集である。他国の形式によつて作られた詩集である。それ故、表現面にもいろいろ模倣の跡が見える。

ここでは文選の影響がみられるものについて考えてみよう。懐風藻に現われた表現が文選の如何なる所から來てゐるのかをみてみたい。懐風藻の表現面を文選の影響の上から分けると、凡そ

(1) 句法の点で影響を受けたもの

(2) 故事を出典としたもの

(3) 詩中の語彙だけを模したものと三つに分類される。紙面の都合上、その中でもここでは句法面の

みをとりあげてみる事にしよう。

#### 句法

目立ったものとして、原詩を殆ど剽窃しているのがある。釋道融の失題の詩がそれである。これは後漢の張衡の四愁詩（文選卷十五）の体を模したものとされる。

我所思兮在無淵。欲往從之兮貧賤。  
路險易兮在山已。壯士去兮不復還。（道融）

あるが、四愁詩は、

一思曰。我所思兮在大山。欲往從之梁父艱。云々  
二思曰。我所思兮在桂林。欲往從之淵水深。云々  
三思曰。我所思兮在漢陽。欲往從之隴阪長。云々  
四思曰。我所思兮在雁門。欲往從之雪紛紛。云々

（文選卷十五 張衡作）

諷にあった張衡が、世間が自分を受け入れてくれぬのを愁え、これを君主に訴えようとして作ったものである。

内容的には兩者、全く異なった趣きとなっているが、形式面では道融が張衡の作を模しているのがわかる。

それに、道融はこの四愁詩だけを模倣したのではなく、末句「壯士去兮不復還」も荆軻の雜歌（卷十四）「風蕭蕭兮易水寒、壯士一去兮不復還」の語句を一字違わず模しているのである。

二句を原詩から取ったものには、他に「昔聞、今見」の語法がある。

昔者聞汾后 今之見吉賓（藤原史「遊吉野」）これは小島氏の解釈に依ると、「汾后」を汾水のはとりの土地神ととり、「吉賓」を吉野の賓と取ってある。つまり「汾」と「吉」は地名を表わしているのである。「昔」と「今」を対応させ、更に地名までも対応させ

た表現となっている。このような表現形式を取ったものを文選にみると、

昔聞汾水遊 今見塵外鍾

（卷十一、謝靈運「從遊京口北固應詔詩」）

がある。「塵外」は浮世の外の意で、中國では當時、北固山という地を指していた。こうしてみると、懷風藻の「遊吉野」が、文選の「從遊京口北固應詔詩」に倣った事は決定的となるだろう。

「昔聞 今見」の対応形を取ったものは、文選には他に  
昔聞投簪逸海岸 今見解蘭縛塵纒

（卷二十一 孔稚珪北山移文）

等がある。

又、卷五、潘安仁の「西征賦」を模して、前と同じ表現手段を用いたものに、大津皇子の「春苑言宴」がある。

聞<sub>レ</sub>符臨<sub>二</sub>雲落<sub>一</sub> 遊<sub>レ</sub>日步<sub>二</sub>金苑<sub>一</sub>（大津皇子「春苑言宴」）  
聞<sub>レ</sub>襟乎清著之館 遊<sub>レ</sub>日乎五柞之宮

（卷五 潘安仁「西征賦」）

次に、懷風藻の特異な表現として、対句の中に異字同調の文字を對比したり、反対語の文字を對比したりしている点があげられる。

（異字同調）

驚波共<sub>レ</sub>絃響 哢鳥與<sub>レ</sub>風聞（大津皇子「春苑言宴」）

共遊聖主澤 同賀擊壤仁（大伴旅人「初春侍宴」）

絲竹時<sub>レ</sub>盤桓 文酒乍<sub>レ</sub>留連（巨勢多益須「春日應詔」）

年華非<sub>レ</sub>故 淑氣亦<sub>レ</sub>惟新（藤原史「元日應詔」）

腰逐<sub>レ</sub>禁玉細 體隨<sub>レ</sub>漢帝飛（荆助仁「詠美人」）

これなども懐風藻作者達の独创に依つたものではない。小島氏の言によると、これらの句法は六朝時代には頻出していたそうである。文選にも、

逝慙<sup>ハテ</sup>三陵墓<sup>一</sup> 存愧<sup>ホシ</sup>三闕庭<sup>一</sup> (卷十 賁躬詩)

伊思<sup>おも</sup>三鑄飲<sup>一</sup> 每惟<sup>おも</sup>三洛宴<sup>一</sup> (卷十 應詔謙曲水作詩)

弦高<sup>れい</sup>三管師<sup>一</sup> 仲連<sup>ちゆう</sup>三衛<sup>一</sup> (卷十 述祖德詩)

誰言<sup>たれ</sup>捐<sup>けん</sup>三軀易<sup>一</sup> 殺<sup>ころ</sup>身<sup>み</sup>誠<sup>まこと</sup>三獨難<sup>一</sup> (卷十一 三良詩)

等、かなり沢山見られる。懐風藻作者達がこれらを参考とした事は疑いないであろう。

結び

以上、懐風藻と文選との関係を大まかに觸んでみたが、懐風藻は文選の影響を著しく受けている事がわかる。序に於ては、特に甚だしく、編纂法・叙述法・用語法に至るまですべて文選のそれを模倣したと思える。

これは詩に於ても同様である。詩題、句法用語などの表現面にそれが顕著に現われている。つまり、懐風藻全般に亘つて、文選模倣の跡が伺えるのである。

懐風藻一篇をみてわかるように、当時の外来書の中では、この文選が最も大きな存在を占めていたと思われる。それは、何と言つても文選が六朝時代の大文学であるから、我が上代人には、それに学ぶべき点が沢山あったと思われるからである。大げさに言うならば、この懐風藻は文選三十巻の中に育ってきたようなものだと言え

る。

懐風藻はこのように中国文学の強い影響を受けた。これは一面、作者の詩風摂取態度にも関係があるとみえる。何故なら、一般に文化程度の低い国が高い国の文化に憧れるように、当時としては、中国より後進国であった我が国が中国の文学に憧れ、これを如何に熱心に取り入れたかが懐風藻の詩と文選との関係からわかるからである。

内容豊富な文選、摂取熱心な我が上代人、これらを考え合わせると、懐風藻の詩が表現形態など、あらゆる面に文選の影響を受けているのは頷ける事である。

しかし、懐風藻がいかにも多く文選の影響を受けたと言っても、何分、文選は膨大な作品数にのほっている。従つて、それから懐風藻に取られた詞句などは文選のわずかな部分に過ぎないであろう。やはり、懐風藻と文選との間には学ぶものと学ばれるものとの差がある。即ちそれは作品数や内容面に於ける深さの差となって現われている。

又、この文選の影響を受けたのも懐風藻だけではない。文選が平安文学に及ぼした影響も多大である。このように懐風藻は文選には到底及ばない事、懐風藻のみが文選の影響を受けたとは言えない事を一言、附け加えて置く。

注1 岡田正之氏「近江奈良朝の漢文学」

杉本行夫氏「杉本行夫註譯 懐風藻」

注2 「懐風藻と文選」(国語と国文学 第九卷)

注3 岡田正之氏「近江奈良朝の漢文学」

小島憲之氏「懐風藻をめぐって」(萬葉第六五号)  
注4 日本古典文学大系「懐風藻・文華秀麗集・本朝文粹」の

頭注による。  
注5 「懐風藻の詩」(上代日本文学与中国文学 下)

## 現代詩と実存

山 本 捨 三

### 1 実存の意味

詩と哲学の親近性について疑うものはやあるまい。特に存在論・実存主義との関連において。

いま、実存主義または実存の視点から、戦後の現代詩を考えるにあたって、まず最初に西洋の実存主義・実存哲学に関する日本の学者たちの考察を参考しつつ、実存の意味の要点をあげておきたい。

他人ではなく、自分自身に生きるか、また生くべきか、さらに生きられないか、と自覚するのが根本的な実存のありかたであり、実存の意識である。そこに実存の主体性が問われるのは当然である。

しかも、他と共にある世間(Mitwelt)の中にあることが実存の現実性であるから、実存とは主体的存在であると同時に社会的存在であることが第一条件となる。すなわち人間という普遍性をもちながら、おのれという個別性を、自由と責任の両面において生きる。生の実現が、実存することの本来的意味であらう。

実存ということばは、使用上かなりあいまいであるが、語源的にいえば、「現実にあらわれている自己存在」が実存の真の意味である。ドイツ語の *Existenz* (エクシステンツ)、フランス語の *existence* (エグジスタンス) がこれにあたるが、ともにラテン語の *exsistere* または *existere* という動詞からきたもので、この動詞は *ex* (From, out) + *sistere* (to stand) # # # から外に出で立つ・現れる、という意味であるからである。

人間はその一人一人が絶対的にそこに置かれている現実存在、実存である。本来の自分は、いかに同情しても他の病人や死者そのものに代ってやれないように、その一人一人はかけがえない存在である。こうした人間においては、その実存は単なる生存ではなく、「一人一人が自分の生存を自分で意識しながら、その生存の仕方を自分で決定することができる」という意味で、現実存在、現存在、実存である。すなわち、実存とは、そのつどそのつど自己自身を外に現していく、開示的存在である。

サルトルの実存主義は「実存は本質に先行する」という。その意